幼児の教育　昭和63年 5月1日発行(毎月1回1日発行)昭和23年4月15日第三種郵便物認可　第87巻　第5号

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1988 5

63.5.2

第87巻　第5号　日本幼稚園協会

これからの保育

大場牧夫・海　卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗　共著

〈全6巻〉

●あなたの保育を深め充実させます。

「保育」を原点にもどして考え直し、子どもたちの自主性の発達を助けたい。自由で生き生きとした保育を目指して保育者自らも高まりたい。

A5軽装判・各256頁・セットケース入り・セット定価9,600円

若い先生も、ベテランの先生も、原点に立ってもう一度“保育”を考えてみませんか。基本的な問題を考えてみませんか。
あなた自身“これからの保育„を確かなものとするために。

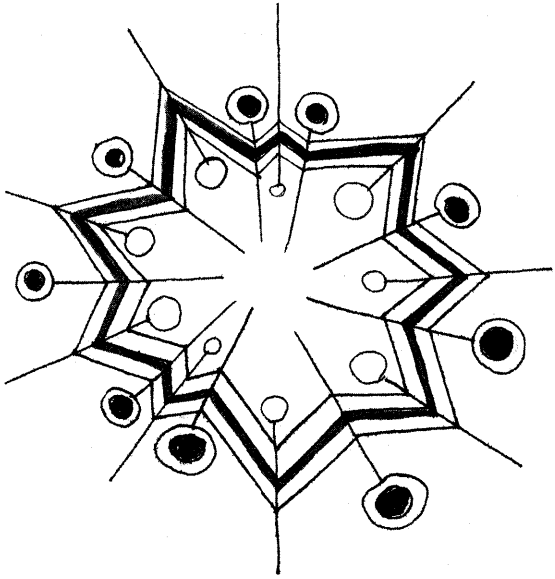
シリーズ「これからの保育」は、

1巻「遊び」とは何だろう	4巻「生活」とは何だろう
2巻「自由」とは何だろう	5巻「集団」とは何だろう
3巻「課題」とは何だろう	6巻「総合」とは何だろう

という命題について実践をふまえて重ねた討論から問題を提起します。

子どもの心と明日を考える キンダーブックの フレーベル館　くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

幼児の教育



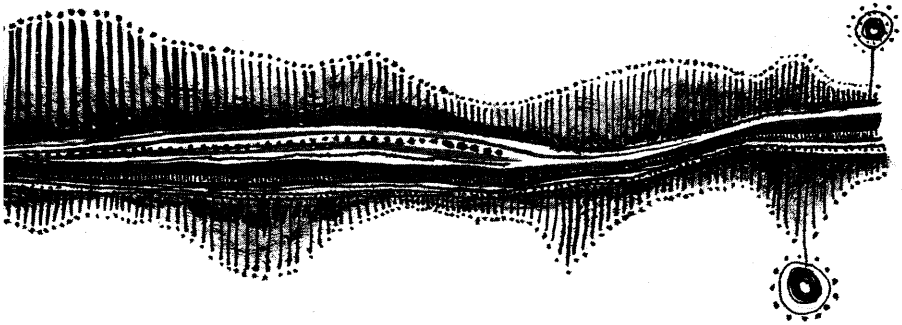
第八十七巻　　第五号

幼児の教育　目次

——第八十七巻　第五号——

〈巻頭言〉
いま・未来をみつめての幼児教育……岡田　正章…（4）
保育の専門性・保育の協力性……津守　真…（8）
SF的読み解き　子どもという風景
第三十七回　おへその見立て……堀内　守…（14）
子どもと(2)
五月・よりそって……清水　光子…（24）
「子どもと共に」
——〝先生〟二年生の記——……平岡　美生…（28）

© 1988
日本幼稚園協会



特集――子どもの日

金太郎……宮田　登（36）

鯉のぼりの里を訪ねて――埼玉県加須市――……編集部（41）

臨床の現場から　子育てを考える　その2

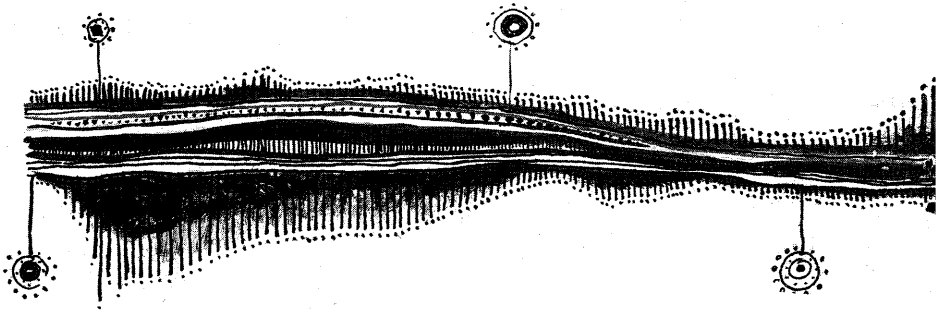
いじめ・いじめられ……飽田　典子…（48）

若いお母さんたちへ

長女と私の中学時代……はるにれの会　塚田　幸子…（56）

カット・福田　理恵

編集部・向山　陽子



〈巻頭言〉

いま・未来をみつめての幼児教育

岡田　正章

幼稚園教育要領が近く改訂されようとしている。その基本方向について、教育課程審議会答申のなかで述べられている事項により、本誌前号で河野重男先生が指摘しておられる。ただ、四つの「幼稚園の基本」、三つの「ねらいと内容の改善」の視点は、何れも、教育課程審議会答申の出た昨年十二月より一年三か月前、昭和六十一年九月、文部省初等中等教育局によって特設された「幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議」がまとめた「幼稚園教育の在り方について」のなかで述べられていたものが、そのまま取り入れられたにすぎない。

それらが、何故、いま、取り上げられたのか、それを問うことが、これからの幼稚園教

育の道を確かなものとすることに役立つことと思われる。

その第一は、現在の幼稚園教育は、家庭・地域において幼児たちの発達が阻害されていることに、一刻でも早く立ち向かわねばならないことによる。幼児たちは、少子化時代で家庭で甘やかされ、反面、親の近視眼的な養育姿勢のため教えこまれすぎている。こうしたことが、自主性が弱く、また、自己中心的な人間を生み出す基本的な原因となろうとしている。

幼稚園は、いま、幼児たちが育ちにくくなっている状況から、少しでも本来の姿に戻し、健全な心身の芽を育くむことに格段の努力が望まれている。このためには、幼児が園内において、できるだけ自主的に、かつ、協調的に行動する機会を多くし、具体的・実践的にその力を働かせながら育っていくことが必要である。

したがって、幼稚園では、幼児が興味のあることに自発的にとりくみ、個人的に、あるいは集団的に遊んだり、作業したりすることが非常に重要である。と同時に、敢えて誤解を招くこととは思いながらであるが、たとえ自分自身でいまやりたいと思っていないことでも、相手の話を聞き、相手の立場を理解するようにし、自分のやりたいことをがまんして、ほかのことをするような経験も、次第に広げていくことが必要である。

こうした意味での真の自主性の芽を、幼児期に如何に育てていくのか、実践をふまえながら、大いに深めていかねばならない。このことは、単に、そのことの意義を子どもに説明してやらせればよいというものでもない。従来、教育の理念として重々わかっているも

のであろうが、なかなかに行なえないものである。いまこそ、幼児のために本ものにならなければならない。

第二は、いまの幼児たちが、やがて成人となって活動するであろう未来において、お互いに尊敬し合い、充実した生活を創造することができるよう援助することが重要である。一般に、いまの幼児たちは二十一世紀に生きるものであるといわれ、それにふさわしい人間像が描かれている。国際化・情報化・成熟化・高齢化など二十一世紀像はさまざまである。

これらの二十一世紀像に生きる人間の基本は、第一にかかわって述べたものと共通とも考えられる。敢えて、さらに敷延するならば、自己自身の見解を創り、これをきちんと主張できるようになるとともに、初めてのひとにも親しみと思いやりをもって接することのできる人間性の持ち主になることが望まれる。

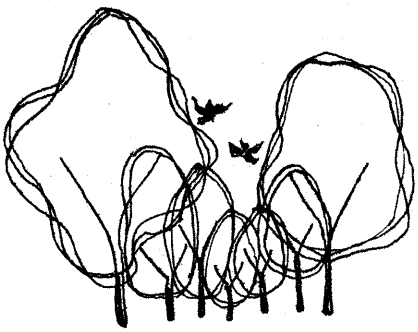
創造性の育成は、フレーベルが世界で幼稚園を創始した原点である。日本人は、いろいろな知識をもっているが、「あなたの意見は何ですか」と問われると、はっきりもののいえないひとが多いといわれる。国際的には、こうした面で、日本人が自己変革することが重要である。このことは、幼児期から「あなたはどう思うの」という教育的関係が重んぜられねばならないということであろう。

また、日本人は、仲のよいもの同志は親しいが、そうでないひととは容易に交流しないいわゆる「島国根性」が強すぎるといわれる。幼稚園で、心身に障害をもっている幼児と

障害のない幼児とがともに生活し合うことによって、後者が必要な援助を行ない、どんなひとともに生活をともにする力を身につける。

少子家族、近隣での異年齢集団による遊びの衰退などは、幼児たちの自然な生活のなかでの尊敬・思いやりの心の育ちを困難にしている。幼稚園では、従来以上に、同一年齢の幼児だけによる活動でなく、異年齢の幼児による保育、あるいは、地域の高齢者との交流を組織的にとり入れるなどの工夫をし、どんなひとともに交流する開かれた心の芽生えを育てることを大切にしたい。

（明星大学・宝仙学園短期大学）



保育の専門性・保育の協力性

津守　真

―― 保育の専門性 ――

私は、いま、毎月同じ子どもたちと交わることの面白さと、それに伴う緊張を日々感じさせられている。

前号に記した五歳のA子は、今年の正月から発作が頻繁で、三学期の最初の日から、学校にきても眠っていることが多かった。目を覚ましたときには、意志のひらめきをみせても、じきに眠りこんでしまう。二週間ほどこういう日々がつづく間に、私も親も、こういう身体状況にありながら、本人も周囲の人もできるだけ快く毎日を過すのにはどうしたらよいかを本気に考えはじめていた。

ある日、母親が、薬の量を減らしてもいいのではないかと医者に相談したら、医者も同意したのでと報告してくれた。発作がひどくなると、母親はその現象に衝撃をうけて、何とかしてくれと医者に訴え、医者もそれに応えようとして、薬の分量が次第に増えることになる。わたしの態度の方が最初なんですね、と母親は明るく笑った。

A子のようすをみていると、動きも鈍く、表情も不快そうで、何かをしていても途中で眠ってしまうのは、発作のせいなのかいずれかよくわからない。発作がひどくなる身体状況が先にあったので薬の量が増したわけだが、結果の行動にはその両者が影響しているのだろう。発作が起っていないときには機嫌よくたのしく過ごせればいいのだが、この二週間ほどをみていると、その点が疑問に思えた。

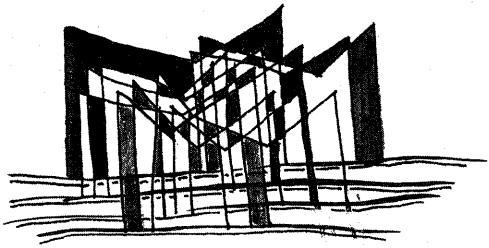
それから更に二週間たった。発作もおさまり、学校でもA子はほとんど眠ることなく、次第に元気な声をあげ、ボールをころがして私とやりとりをし、一日活発に動くようになっていった。機嫌の良い子どもにもどったといえるようなその様子をみていると、夜中には発作がしばしばあるとのことだが、これでよいのだと思える。ちょうど発作がおさまる時期だったのかもしれないし、また、それにあわせて薬の量が減じたためなのかもしれないが、いま私はその因果関係や功罪を論じようとしているのではない。医学の専門的観点はそれとして尊重されねばならないし、同様に、子どもの毎日の生活をみる保育の観点も専門として重視されねばならぬことを、私は述べているのである。

この場合には、生活の中での母親の判断を、医者は尊重した。日常の状況にもとづいた見識だったので、説得力もあったのだろう。しかし、薬の量を減じたらとり返しのつかない悪いことが起るというように、医者が専門性の権威を主張したならば、母親は自分の判断に不安をもち、動揺するだろう。分化した専門科学や、制度に支えられた専門が力をもつ現代においてはこういうことが起りやすい。毎日の生活の全体を、生きた力動的なもの

としてゆく保育の仕事が、単なる雑事とみなされ、それ自体の専門性が見失われる傾向にある。母親が保育の意味を自覚せず、自らのエネルギーをそこに注ごうとしない。保育者が自らの保育を他の専門に従属させて、生きた生活をつくり上げるという高度の専門性を認識しない。このことが、現代の生活を一層不安定なものとし、落ち着きと明るさを失わさせているのではないかと思う。

保育は、相手が自らのアイデンティティをつくり上げるのを助ける仕事である。保育者とは、それを引き受けることに自らの人生の意味を見出す者のことである。日々の保育の生活は、どこにそのような重要な意味があるのかもわからないような、小さなことの連続である。しかし、よく見ると、そこには、日々、異なった状況がある。その状況をどのように読みとり行為するかは、保育者に与えられた高度の専門的課題である。

私どもの生活は、身体的にも、社会的にも、ほとんど運命的ともいえるような、人の力によって変えることのできない条件のもとにある。その制約の中で、日々を快く、それぞれが生きる意味を見出せるように、生きた生活をつくるのは、保育の力である。



―― 保育の協力性 ――

保育に携っていると、ひとりの人はひとりの分しかなし得ないことがよくわかる。自分の力の及ばないところは、他の人にゆだねなければならない。他の人が子どもと交わるときには、同じ子どもでも、私が交わったときとは異った状況を展開するのだが、そこには共通の人間理解があり、他人もその子どもとの間に生きた関係をつくることを、信頼してゆだねる。同時に、他人には私と違った感受性、力量、見方があるから、子どもは異った人々と接することにより、違った面がひき出される。このことは保育をしているとよくわかる。

ひとりの人が、ひとり分以上の力を持とうとすると、保育に無理が生じる。マイクで遠隔操作をして多数の保育者を動かすことなど、考えただけでも滑稽である。あるいは、科学的につくられた方式を応用することが保育であるとする考えは、人間的関係を無視するものである。

力動的な保育の実際では、ある時間だけを見ると、ひとりの大人がひとりの子どもと対していることがしばしばある。ひとりの子どもとの時間が深められないで、大人が常に全体に注意を散らせていたら、その保育は浅薄なものになるだろう。しかし、一日を通してみるならば、ひとりの子どもはいろいろの大人や子どもとふれている。この点が閉じた関係のセラピーと開かれた関係の保育との相違点であろう。保育においては、同じ保育の場に何人もの人がかかわるので、保育者同士の信頼的協力がなくては保育はなしえられない。

ある朝、三歳のMくんがO先生の手をひいて二階にゆく階段を昇るのを私は見ていた。そのあとSくんが門から入ってくるのを私は出迎えた。私はSくんを追って校

長室にいったが、彼は私の机の上から眼鏡をとると、O先生をさがしに二階にいった。私は何度も眼鏡をかけさせられて相手をしたことがあるが、彼は一緒に過そうとする大人に眼鏡をかけさせるのである。（最近亡くなったSくんの父親は眼鏡をかけていた）SくんはO先生を見つけるとその手をひいて階下へと去ったので、私は、はからずもMくんと遊ぶことになった。Mくんは往きかう大きい子どもたちの間をぬうように歩きまわりながら、いろいろの物に手をふれることを楽しんでいた。この日、彼は歩きまわりながら、いろいろの物に手をふれることを楽しんでいた。この日、彼は歩きまわりながら音のざわめきを聴覚で触っているように思えて、私はその感覚を想像しながらMくんと一緒に歩き回った。手には青い透明なレゴの小片を持っている。昼ごろから別の実習生がMくんをみるようになった。あとで話をきくとピアノを弾いて過したという。私とだったら展開しなかったであろう場面である。

Sくんも午后からはO先生と代って私とトランポリンをとび、私は私なりにふざけたり、気持をかわすことを楽しんだ。数人の子どもたちがその囲りを女の先生と賑やかに走り回っていた。しばらく後、眼鏡をかけた別の男の先生が通りかかるとSくんはその手をひいた。若い男性とのトランポリンは、Sくんには更に愉快な様子だった。

SくんもMくんも、この日、満ち足りて帰っていった。いずれも私とだけ交わったのだったら、これほどに充実した生活とはならなかったろう。何人かの大人たちが、状況に応じて行為し、ある時、互いの信頼のもとに子どもを相手にゆだねる。それぞれがおかれた場所で出会った子どもと精一杯に取り組み、それがつながって、どの子どももその一日を自分のものとして生きることができる。

保育の実際は、保育者同士の信頼的協力関係によって成り立つ。それは、それぞれが、自分と対等の人間として相手と向き合うことを基本とする関係である。その人同士が協力できるのは、一方には、自分が他者の状況に

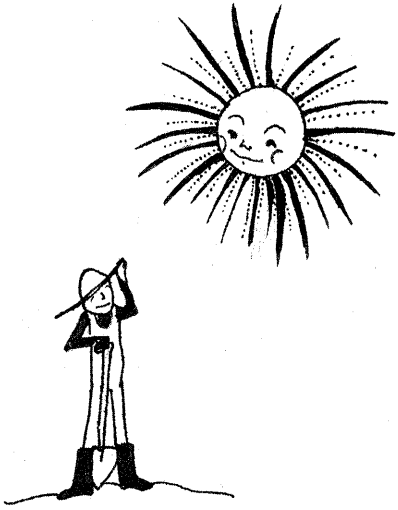
おかれたならば同じようになしうる交換可能性をもつからであり、他方には、異った個性をもつ他者が開くであろう未知の可能性を信頼するからである。それらが織り成されて力動的な保育の場となる。

子どもたちの一日の生活の全体を、生命的なものとするところに保育の専門性がある。そのような生活は、ひとりの人だけでつくることはできず、何人かの人々の協力を要する。それぞれが、生活全体を生かす保育の価値を認識し、その意味を自覚する人であるときに、互いの信頼的協力は生活の場を力動的にする。

同じ場ではたらく保育者同士だけでなく、親も私共と、信頼的協力関係に立つ保育者である。

保育者は、身辺の狭い世界だけに閉じこめられているようにみえても、決して孤立しているのではなく、人間を育てるという大きなコミュニティの一員である。

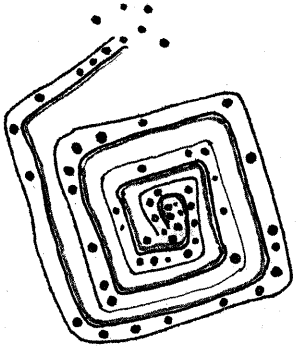
（愛育養護学校）



SF的読み解き
子どもという風景

第三十七回
おへその見立て

堀内守



笑う「へそ」

「へそ」を話題にすると、たいていの人が笑う。その笑い声は、大らかである。小馬鹿にした笑い声ではない。さりとて大笑いでもない。洪笑でもない。どこか謙虚でつつましく、しかも和(なごや)かである。

「へそ」が話題になるとき、知らん顔をする人はあまりいない。いたとしたら相当「へそ曲り」である。「へそ」は、公然たる場で話題になることはあまりないが、私的な世界では場の雰囲気を

和やかにする。

さて、その和やかさは、単にふわふわと浮わついたものなのだろうか。そうではない。むしろ、この和やかさは、私たちの常識となっているものをするりと通り抜けて、もうひとつの世界へ連れていってくれることもあるのだ。その世界は、私たちの存在の奥深いとこころを示唆してくれる。だから、「へそ」を話題にすると、人びとは理屈を超えて笑い出すのかもしれない。その世界は、ちまちました、小ざかしい世界ではなく、人間社会のもろもろの差異が消えてしまうような世界かもしれない。

そう思って、思い当たるところをさぐってみると、「おへそ」は結構宇宙論的なテーマにもなっている。スケールが大きいものだから、現代の理屈にはなじまないのである。老壮思想（老子や壮子の思想）などは、そのスケールの大きさから見ると——理屈をこねる人から見れば「バカバカシイ」といって無視されるだろうし、少し関心をもっている人にとっては大いなる「息抜き」に思えることだろう。

実は、「バカバカシイ」と思われながら結構好まれ、「息抜き」に活用されてきたのが笑い話であり、それは何かを話題にして、次々と笑いを誘発し、話題をズラしながら、「息抜き」を楽しむものであった。人生の「息抜き」である。世に「おこがましい」という表現で残っているものは、そのナレの果てである。「おこ」は「烏滸」と書いた。これは中国南方に住む民族の名である。そのほか「おこ」は「尾籠」とも「痴」とも書いた。

きわどい境界

「痴」は、「疒」に「知」と書く。「疒」がついていても、「知」の一形態であることは直ちに推察がつく。「疒」の方も「ヤマイダレ」と読む割には境界はゆるやかである。わざと愚か者の役割を演じ、それが笑いを誘発するなどということは、今日でも芸能のなかにたくさんある。「尾籠」も「びろう」と読むと、遠まわしに表現しないと失礼な話題になってしまうが、反対に、失礼

にならない程度に、上品に表現したならば、こんなに生き生きとした話題もなかろうと思われるほどのテーマに満ちている。

何もルネッサンス時代にまでさかのぼらなくともよい。「尾籠」な譚は、世界中の物語の底流に多い。糞尿譚の多いこと！

それとくらべると、「おへそ」は、かわいらしい。「尾籠」なテーマからは離れているようでいて、構造はよく似ている。色、匂い、形状を克明に記述している糞尿譚の作者たちも、こと「おへそ」に関しては、その形状を微笑みをもって記述しているのみである。

「おこ」は、意味の上では二つの系列を含み込んでいる。第一は、「ばからしい」という系列。「おろかしい」「あほくさい」「ばかばかしい」という日常語の系列。第二は、「なまいきだ」という系列。「出しゃばり」「出過ぎている」という日常語がこれに含まれる。

「おへそ」は、この二系列にぴったりのテーマである。

「おへそ」という音がすでに日常の音のネットワークのなかでは少なからず異質ではないか。「臍」という漢字を見つめても、異様さは増す。なお、見つめていると、異世界が見えてくる思いがする。

古き時代、「おへそ」の下一寸ほどの所に体気がたまると健康になると信じられた。今日でも「気を鎮め」たり座禅を組んだりするときには心の重心をそのあたりにもっていくものとされている。「臍下丹田」というのがそれを表わす。

「出しゃばり」の方は、まさにそのものである。「おへそ」が身体からの類推で別の「出ているもの」に転移させられ、いろいろなものが「〇〇のへそ」と呼ばれていた時代がある。小突起や、物の中央にあるふくらんだ部分が「へそ」と呼ばれていた。石臼や重ね戸棚などのかさなり目にある小突起は「へそ」だった。

おへそのくすぐり

夏、はだかになって水遊びをしている子どもたちが、

何かのきっかけで、「おへそ」と口にする。とたん、このことばがいっせいに伝播する。「おへそ」「おへそ」「おへそ」……。そして笑いころげる。

この小景の向う側には、いま見てきたような和やかな世界から厳粛な世界までが広がっている。

カミナリが鳴ると「おへそ」をカミナリさんに取られてしまう。そういう言い方は今でもなされている。腹を冷やさないために腹掛けをする。その腹掛けのことを「カミナリさん」と呼んでいるところもある。この意味の転移は、子どもの世界ならでは生じない面白い現象なのである。

「カミナリにおへそを取られる」という言い方。

それはこわい話である。そして、しだいに「おこ」なる話に転じていく。本気で信じていた子も、時を重ねるにつれて、何となくくすぐったい話だと理解できるようになる。話そのものがこっけいに思える。そればかりか、その話を本当だと信じていた自分が変わりはじめたこともわかってくる。後者の方は、複雑な思いにあふれている。自分はあんなにも幼なかったのだという気持と、自分にもそういう無邪気な時代があったのだという二重の気持である。一方は、世界が狭かった自分への反省に通じ、他方は、やや「なまいき」になった自分への反省に通じている。「ばかばかしい」という系列と、「出しゃばり」という系列はここにおいても生きている。

自分でさわっても全然おかしくないのに、他人にさわられると、どうして「おへそ」はくすぐったいのだろう。

「おへそ」を話題にするだけで、人びとが笑い出すのは、このような奇妙な体験があるからではないか。

自分でさわっても何ともない。それなのに、他人にさわられると、くすぐったい。この体験は、「くすぐったい」という体験、つまり身体の奇妙なしくみに目を開いていく入口のようなものである。生きている身体は、他者の存在を前にすると、こういう奇妙な現象を生み出す。

実際に他人に手を触れられなくとも、「くすぐるぞ

う」とかまえられただけでも、自分の身体はむずむずしてくる。そして逃げまわる。むずむずは増幅していく。

くすぐることを「擽る」と書き、「こそぐる」とも読む。この漢字は面白い形をしている。字までが、「くすぐる」ような形に見えてくる。それは本当は錯覚なのであろう。実際には「くすぐる」とか「擽る」などよりも、体験の上では「こちょこちょ」という擬音による表現の方が先行し、さらにそれに先行するものとして身体の「むずむず」があるはず——と考えられるからである。

「むずむず」は、他者の存在をもとにした場がなくては生まれない。

へその緒

この「むずむず」の由って来たるところは深い。自分の身体を超えている。母胎内で母体と一体化していた時の絆なのだから。

産科学の用語を超える「母胎」「一体化」「絆」「緒」。産科学の用語を超えた「へその緒」の民俗的・宗教的扱い方。誕生とともに「へその緒」は切られ、医学的に処置されなければならない。やがて、新生児のおへそに付いている「へその緒」は取れる。取れたあとの「おへそ」の形は、新生児のおなかの大きさとくらべると大きく感じられる。のみならず、まだ形が整わない。「緒」がついていた痕跡がその形に残っているからである。

「おへそ」は当分は大事に扱われる。新生児に湯をつかわせるとき、おとなたちはことさらおへそのあたりに気を遣う。

当の新生児はそんなことを知らない。成長してのちも、思い出すことはない。思い出そうとしても、記憶にはないことなのである。

新生児の「おへそ」の形は当分出っぱっている。取れてしまった「へその緒」の方は、桐の箱にていねいに収められる場合もある。本当は、実に多様な処理のされ方をしてきたのだった。

桐の箱に収められたものも、時がたつうちに色も形も

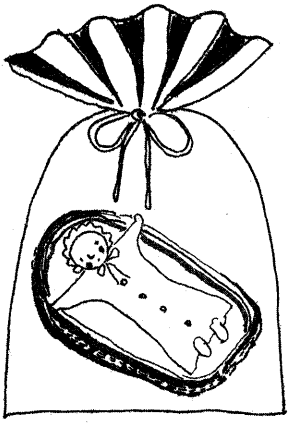
変わり、しなびて、からからになっていく。何やら異様なモノに姿を変えていき、たんすの片すみに入れられたまま忘れ去られていく。

でも、おへそは子どもの夢をさそう。

時折、おへそはかゆくなったり、赤くはれたりする。そして、おへそは自己主張する。そのほかは忘れ去られている。おへそのない人形に驚いた経験のある人も多いことだろう。ふだんは忘れ去られているのに、向こう側に出現した人形におへそがないと異様に思えてくるから面白い。

かといって、いかにもとってつけたように、人形のおなかにまん丸なおへそがあるのも異様なのだ。

こんなわけで、人形のおへそは、実にかわいらしくつくられている。人形ばかりではない。泰西の名画や彫刻を見てみると、作者がいかにおへそに気を遣っているかが見えてくる。天使と並んで描かれているキューピッドの丸っこい手足は、おなかのかわいいおへそがなかったら、「かわいさ」は半減するのではないか。そう思われ



るくらいだし、身体の美しさに気づいた画家たちがおへその形とくぼみと、おなかの筋肉との関係を描くのに苦心したのもよくわかる。

注意したいのは、おへその形ばかりではなく、おへその位置である。どの辺に描くかによって、身体のバランスはまるで変わってしまう。

そもそも、こんな変なものがなぜ——と画家や彫刻家たちはいちどならず気にしたことであろう。マンガならば、その位置を点で示すだけでもよいだろうし、場合によっては×印を描くだけでよいのに、絵や彫刻になると、おへそはしかるべく自己主張をしてくるのである。

おへそは身体の力、筋肉の表情を統合している。もし、おへそがなかったなら、おなかはのっぺらぼうになり、マネキンのように冷やかになってしまうだろう。

出っぱっていた幼児のおへそはしだいに形がよくなり、おなかのなかにひっこんでいく。

茶をわかすへそ

その由来はよくわからないが、「へそで茶をわかす」とは「おこ」な表現である。「ばからしい」までに意表をついた表現であり、気の利いた表現であり、その上、歯切れもよい。

表現が「おこ」だけではなく、「おこ」を代表しているも。形が「おこ」だけでなく、内容も「おこ」なのである。

反対の極には「ほぞをかむ」という表現がある。「ほぞ」とは「へそ」のことであるから、「へそをかむ」と言いかえることもできるが、迫力は「ほぞ」の方が強いようだ。「ほぞをかむ」とは、かなり古い表現で、かもうとしてもかめないはずのへそを、あえてかむというところから、「後悔しても及ばない」というたとえに用いられる。

この「ほぞ」のみじめさとくらべたら「へそで茶をわかす」方は、「へそが宿がえをする」と並び、ひどくおかしいこと、おかしくてたまらないことをさしていて、相当なレトリックといっても過言ではない。それは「ほ

ぞをかむ」よりも新しく、饒舌な文化の中から生まれた表現であろう。「へそ曲がり」「へそ繰り」と同時代、同一のサブカルチュアの中から生まれた。

「ほぞ」系と「へそ」系を組み合わせてみると、「ほぞをかむ」式の表現は、大仰（おおぎょう）であり、教訓的であるし、「へそ茶」系は、大仰であることは共通しているが、ズレを楽しみ、笑いを誘発する構造になっている。だから、「ほぞをかむ」方は、教訓、格言、諺として通用した。他方、「へそ茶」の方は、ドンデン返し、アクロバットに似て、日常のあそびの世界に生き続け、日常生活の規範をつき抜けてみたり、ひっくり返したりする会話の世界に生き続けた。

世界のへそ

小高いところ、平らかなところに少し小高くなっているようなところは「へそ」と呼びならわされてきた。

広場をつくる。すると、まんなかに柱を立て、塔を建て、何とかして上下の関係をもち込む。それが文化の発端になっている。世界像を描くとき、宇宙像を描くとき、人間はかならず「へそ」のたとえを使った。その場合の「へそ」は、天と地をつなぎ、地のまん中を示し、この世界がそこを起軸として秩序づけられていることの証（あかし）となった。岡、山というような自然物が「へそ」と見なされることもあり、岡や山が聖なるシンボルとなることもあった。岡や山がない平地の場合には、岡や山に模して柱を立て、塔を建てた。それを岡や山に「見立て」たのである。

「見立て」は、本物ではない。「つくりもの」である。だが、それが「こしらえもの」であることを、それをつくった人間たちも知っていた。つまり「見えて」は、引き立て、つくり立てることであった。

遊びには、この意味の「立てる」と共通するものがあるらしい。

「おへそ」が、その実際の場から離れさせられて、宇宙の「へそ」として人間に安心感を与えるのも、そのためである。だから、おへその話題は人を和ませるのであ

ろう。いっときの笑いであっても、おへその笑いは、人間が忘れている右のようなもろもろのことを深層から見せてくれるからであろう。

迷宮としてのおへそ

おへそは穴の形をしている。しかし、蝸虫に似て、内部はどうなっているのか、よくわからない。トンネルのように向うが見えることもない。時どき、ゴマなるものが出たりするぐらいなものである。

だからこそ、内部は迷宮に思えるのだ。

蝸虫のようにぐるぐるまわりの形をしていて、どこかに通じている。その「どこか」はよくわからない。好奇心を誘うけれども、探検する手だてはない。したがって、夢や幻想をかもし出すのであろう。

ここでは素朴なリアリズムはすべて拒否される。

「夏、おなかを出していると、カミナリさまにおへそを取られてしまうよ」

「うん」

これが予想されているシナリオである。

素朴リアリズムが少し徹底すると、これに対する返事は少し変わる。

「取られっこないもの。だって凹んでしまって出ていないもの」

もう少し進む。

「どうやって『取る』のかな。そのあとどうするのかな。飾っておく？　それとも食べてしまう？　マンガの本には佃煮にしておくって描いてあったけど……」等々。

科学に対する信仰は、日常場面においては素朴リアリズムを強化した。夢や幻やロマンを「おこ」なものとして（愚かなるものとして）小馬鹿にするのが〝科学的〟ということになるほどになった。けれども、どこかおかしい。「おこ」には別の系列、つまり「なまいき」という系列もあった。素朴リアリズムがいきまいて「なまいき」になると、あの和らぎを忘れ、消去してしまい、ついにはニヒリズムに流れていく。そして次々と新奇なよ

そおいをもった流行語をつくり出し、これこそ世界や人間を救出できる護符であるとばかりにつくり立てる。ところが、わずかの時がたてば、それはすべて忘れ去られていく。最新の流行の空しさが見え見えである。

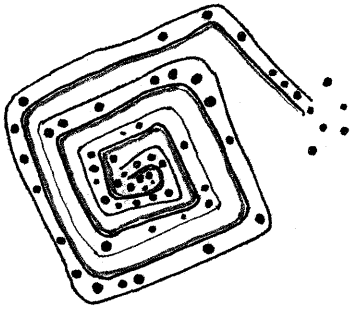
ならば、もっとしたたかに、「おとな」とか「子ども」という区分を超えてみて、共通に話題にできるネタはないのだろうか。こう思って、「おへそ」にたどりついたわけである。

「おへそ」は意外にも深く、広い世界に通じていた。

「おへそ」は、私たちを引き立てたり、逆に私たちが「おへそ」を別の何かに見立てたりすることができる。見立て、引き立て、つくり立て、そのどこをとってみても、「おへそ」は大いなる笑いの根源を開示してくれる。

これを「へそ曲がり」とののしられようが、「へそで茶をわかす」とからかわれようが、追究はやめないでおこう。「おへそ」というテーマは、ぐーんと広いのだから。

（名古屋大学）



子どもと(2)

五月・よりそって

清水　光子

「大そうじ、四月の連休にしたいの、手伝ってね」と、或年の四月の半ばに私の子どもらに言ったら「手伝うよ、だけど風薫る五月にしようよ」という答えがかえって来た。そうして、事実はそうしたのだけど、どうして彼等はそうしたかったのか、友だちとの約束らしいこともまだしていなかったのに、と、数十年たってまで、この時期になるといつも思い出していぶかしむ。

〝やっと慣れたのに、連休で、もとへ戻ってしまって！　又やり直しみたい！〟と嘆く先生。

〝「いってまいります！」の朝の声も、「ただ今」の様子も四月の頃より落ちついたようだ。新しい環境になれたせいね、きっと。〟と安心している親。でも、本当にそうだろうか？

「なんというすばらしい生育の力であろう。田に畑に、野に庭に、（山に林に森に、海に、と加えてみる私）むくむくと萌え出る若芽の、伸びて伸びて伸びてゆく勢いは、日に日に目を驚かすのである。しかもそれに劣らないのは子どもらの活力の伸長である。毎日その中に倶に居ながらも、日々に新しい目を見はらさせられることばかりである。」と倉橋惣三先生は『育ての心』で詩っておられる。五月の子ども等って、そうである筈。昔も今も、いつでも、と思うのは私の老化した独断と偏見でしょうか。

連休あけに時として見られる一種の退行はなぜであろう。自然にはそんな現象がないとしたら（若しかしたらあるかも知れないのに、私が知らないだけかも）それは人間だけで、その社会生活、人間関係が複雑になった今、世紀末独特な何かに原因があるのかも知れない。「折角、やっと慣れたのに！　みんなと一しょにお話もきけるし、ひとりでトイレに行けるし、リズム遊びもやるようになって、何よりもお家へ帰りたいと泣かなくなったのに……」などなどと、大人の目の高さからの子どもばかりをみて、慣れることに専念していた保育者、もう一度、原点に戻って、子どもの身になって、この輝かしい五月の天地にふさわしい子どもとの生活を考えてみたいと思ったりする。

常日頃、夢中になって子ども達と生活している親だからこそ、先生だからこそ、我子、

我組の子にばかり、思いが集中し、つい大きな心で相手の立場に立ってものを考えられなくなってしまう。〃あの子にうちの子はいつもいじめられている。〃〃あの子の組でなくして欲しい〃〃うちの組の子はそんないじわるするわけがないのに〃などと、集団生活のある時期にそのようなトラブルが起る。生命力が天地に溢れるとき、エネルギーのアンバランスのなせるわざだろうか。

五月病っていうのが新入社員、大学生などにもあるときいたのは、もう何年も前のことであるけれど。

自然の営みは驚くほど均斉がとれ、バランスがとれた、グローバルともいえるように思う。五月晴れの前後に、いかにも若芽をいたわるかのようにやさしい雨が降る日がある。そんなときの心がヴィヴァルディの組曲「四季」の春の部にうたわれているのではないだろうか。

剣のような葉形のしょうぶの花の、何というなよやかな姿だろう。日に日に日射が強くなり、木蔭がうれしい日も五月にはある。そんな中へ子どもと一しょにたのしみ、一杯に遊びたい。

〃惜しめど甲斐なし、すぎゆく春は。悔ゆれどすべなし、すぎゆくときは〃といういささか古風な、センチメンタルな唱歌を小学校低学年のとき、教わり、うたっていたら、クラスの受持の若い先生が「その歌詞教えて」と言われたことがあった。大人にとっては惜春の情を感じもする五月である。子どもにとってはどうだろうか。「おばあちゃん先生も

むかしは子どもだったんでしょ？」と言われた。子どもの感性を養い、みがくことが今の幼児教育で大切だと言われているが、もと、子どもであるおばあちゃんには、それにはどうすればよいのか、どうもわからないことばかり。

でも、何はさておき、ミヒャエル・エンデが「モモ」の中でいっている〝時間泥棒〟にならないで、五月を子どもと楽しみたい。

「人間の第一の権利は子を養うことだ。」とのことばをフランスの医師でボランティア活動をしている人が言った。養うのと、育てるのとは同じではない。憂いに人が寄り添うのを優しさという。憂うことと愛することはよく似ているようだ。どちらも相手を思いやるこころである。

何もかもが新鮮で、輝くばかりの五月の子どもの周囲に、子どもの中に、もし小さな憂いの影がみつかったら、寄りそって、親犬のようになめてなめてその傷を癒してやりたいものである。暑い、はげしい夏の来ない前に。

（音羽幼稚園）

「子どもと共に」

――〝先生〟二年生の記――

平岡　美生

私は三人兄弟の末っ子のせいか、小さい時から自分より小さな子どもが大好きでした。そしてその気持ちのまま、幼稚園の先生になりました。一年目は幼稚園の中でも一番小さい年少児、そして二年目の現在は年中児と共に毎日を過ごしています。

新米の私には、今日の保育は充実していたという日より、今日も……という反省や迷いの日々ばかりです。そんな中での二年間の子どもの様子・出来事などを書きたいと思います。

○先生

初めて先生と呼ばれたのは教育実習の時でした。かわいい声で呼ばれると何となく嬉しくなったのを覚えています。しかし現実に先生となった途端、戸惑ってしまいました。毎日毎日子どもたちが甘えてきたり、助けを求めたり、ケンカの仲裁を求めてきたりと容赦なく「せん

せい！」を連発するのです。またある時はお母様方から先生と呼ばれるのです。〝私が先生？〟。私よりも年上で子どもを生み、育てていらっしゃる人生の大先輩に、私が先生として話をする……。こんなことを先輩の先生に相談すると

「年令は上でもあなたは先生の資格を持っているプロなのよ。」

と話してくださいました。もちろんプロにも初級・中級・上級があります。私はまだまだ初級ですけれども、それ以来、私なりに先生としてお母様方とお話しをして、時には助けていただいています。

そしてもちろん子どもたちにも、助けてもらっています。降園前に連絡帳に手紙を入れ忘れていた日がありました。

「ごめんなさい。先生手紙入れるの忘れちゃった」

「先生なんだから忘れちゃだめだよ。」

「あら、みんなだって忘れ物することあるでしょ。先生も皆と同じなのよ。」

子どもたちは不思議そうな顔をしていました。でもそれからは、

「先生は忘れん坊だからなあ。」

と、言いながらいろいろと教えてくれることが多くなりました。先生という言葉にすっかり慣れてはきましたが、いつまでも〝私が先生？〟という気持ちは持ち続けたいと思います。最後に子どもにとっての先生とは、どんな存在なのでしょうか。子どもとの会話で御想像いただけますか。

「先生にもお父さんとお母さんいるの？」

「うん、いるわよ。」

「本当？」

「先生いくつ？」

「7さい」

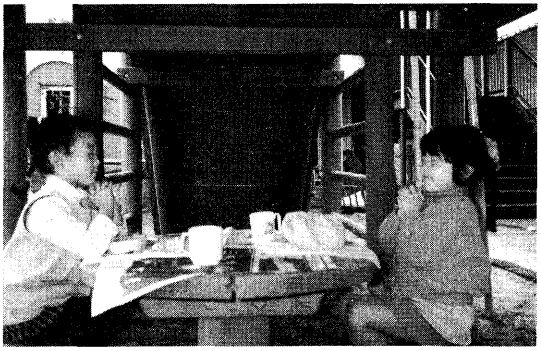
「それなら私のお兄ちゃんといっしょだね。」

「先生なにどし？」
「ぶたどしょ。」
「ふーん。僕はいぬで妹はいのししだよ。」

○お祈り

私たちの園はキリスト教主義の幼稚園なので毎日の保育のどこかで礼拝を持ちます。心を静かにし、讃美歌を歌い、お祈りをします。神様に、毎日元気で幼稚園に通える喜び、自然の恵みを与えられている感謝の気持ち、また病気などで休んでいる子どもを治してくださるよう

雨の日の散歩



お祈り

にという願いを、お話しする時です。入園したての頃は、〝天の神様〟も〝アーメン〟もわからない子どもたちなので、少しずつお祈りをしてゆきます。

七月の小雨の中、教会まで散歩に行きました。

「雨が降っているのにお散歩？」

「長靴だからいや。」

知らないうちに子どもは、お散歩は晴れた日と決めていたようですが、歩き出すと嬉しそうでした。教会の庭には紫陽花が咲き、木々はしっとりとして、濃い緑色におおわれていました。その場所で子どもたちは目を閉じてお祈りをしました。雨のおかげできれいに咲いた紫陽花を見て、木の薫りを感じながらの子どもたちの隠やかな「アーメン」という声が聞こえました。

また、十月の良く晴れた日に園庭でお弁当を食べた時のことです。それぞれ好きな所にお弁当を広げたので、食事の前のお祈りは子どもたちにまかせることにしました。

「天の神様、いただきます！」

「神様、今日もおいしい食べ物をありがとうございます。アーメン。」

思い思いにお祈りをしていました。まだお祈りに慣れない友だちに、

「はい、手を合わせて。私がお祈りするからアーメンと言ってね。」

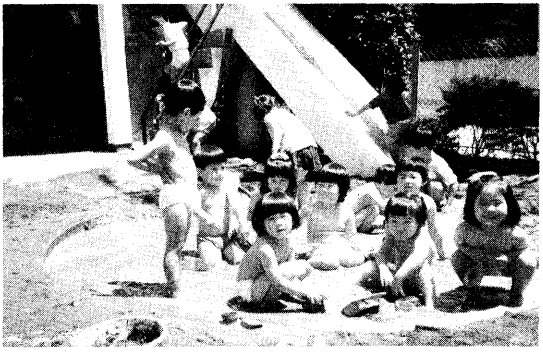
というしっかり者もいました。

このように目に見えないものに対しても、祈るということで、それぞれの子どもなりに近づいているのがわかりました。

○はだし

梅雨の合い間の晴れた日は、園庭が海のない砂浜になります。園庭に砂場があるのではなく、砂場全部が園庭なのです。ですから子どもたちは、はだしになって水遊びを盛大に始めます。その時は私もはだしになっていっしょに走りまわっています。素足で砂の上を走るのはいくつになっても気持ちのいいものです。

はだし



はだし

しかし、その暑さの中、くつ下も靴もはいて、汗びっしょりになり遊んでいるA君とB君がいました。

「暑くない？　はだしになれば」

「うううん。いいの。いいの。」

「はだしになるの気持ちいいわよ」

「いいんだよ。だってまたくつ下はくの面倒だから。なあー。」

「いいのよ。部屋の中でもはだしのままで。」

「いいんだってば！　僕のおばあちゃんが言ってたもん、はだしで遊ぶとばい菌がつくからって。」

私はあわててつけ加えました。

「大丈夫！　ばい菌なんかあとで足を洗えば落ちるわよ。先生は小さい時からはだしで遊んでいるけど病気になんかならないわよ。」

それでも二人はしばらくそのままでした。A君は理論派なので、私の話ではまだ納得できない様子、B君は几帳面な性格なので、なかなか手強そうです。強制しても楽しめるものではないので私はその場を離れました。それが良かったのかいつの間にか二人は、はだしになって他の子どもといっしょに泥んこの遊びをしていました。

足を洗い、部屋に入ると二人がくつ下をはこうとしていました。

「気持ち良かったね！」

「うん」

この会話を聞いたのでもう何も言いませんでした。

○楽しいこと

年少児も二学期になると随分と落ち着いてきました。年少の担任をしているもう一人の先生と、何か子どもたちといっしょに楽しいことができたらと考えていました。

「クッキー作りなんかどう？」

「わぁー、楽しそう」

ということで話はすぐにまとまりました。それまでは〝保育における六領域〟が常に頭にありましたが、なるほどこういう領域があっても楽しいものだと思いました。

ぐりとぐらの絵本を手本にして、子どもたちにクッキーの材料をきいてみました。バター・砂糖・卵・粉とポンポンでてきました。それに私たちが、バニラ・エッセンスとベーキング・パウダーという魔法のくすりを教えて、それから買い物です。お母様とのお買い物とは違う楽しさが子どもにはあったようです。クッキーを作る時は、先生がお料理の先生に早変わり、子どもたちもバターを練ったり粉を混ぜたり、男の子も得意顔でした。バニラ・エッセンスの甘い匂いには、皆、うっとりとした

様子でした。型抜きをして焼きあがったクッキーは小さなものでしたが、子どもたちは大事そうに少しずつ食べていました。

年中児の楽しいことは、三学期になり、少し趣向をこらし、三クラス合同のこままわしパーティーを開きました。招待状・バッグを作り、クッキーも焼きました。そして当日は、お弁当の代わりにサンドイッチを一人一人作りました。パン・チーズ・ハム・パンと順に重ねていく簡単なものでしたが、子どもたちは自分で作ったということが嬉しかったのでしょう。残す子どもは誰もいま

手づくりクッキー

サンドイッチづくり

せんでした。クッキーを持って帰るC君は、

「二個しかないけど、お父さんとお母さんと弟に分けてあげるんだ」

と言っていました。

子どもにとって楽しいことが、毎日、家庭や幼稚園、または友だち同士のどこかであればいいと思います。ある先生がこうおっしゃっていました。

「子どもが夜寝る前に、ああ今日も楽しかったと思えればその一日は満足できたものといえるでしょう。」

子どもも私も毎日こうありたいと願っています。

（ひこばえ幼稚園）

パーティー

金太郎

宮田　登

「金太郎飴」といえば、最近のレトロブームで復活してきた懐しい棒状の飴で、どこを切りとっても、あの特徴的な金太郎の顔が表われてくる。童髪でどんぐり眼(まなこ)のいかにも腕白坊主といった表情を飴の断面に浮かび上らせるテクニックは、江戸から明治に入って出来上ったもので、手のこんだ技術を代々伝えている職人が東京にはまだ残っている。

童謡の「金太郎」が世間に流布したのは、明治三〇年のことで、小学校唱歌の一つに採用されたことから、馴染み深い歌の文句が、全国でうたわれるようになってきた。金太郎のモデルは平安時代中期の武将坂田金時であり、源頼光の四天王の一人として活躍して、すでに『今昔物語』巻二八などにも登場している。彼の幼年・少年時代、元服する以前の腕白ぶりが痛快に描かれたお伽噺は、やはり明治三〇年代に評判となった。これはもちろん近代に入ってからの脚色であり、ちょうど日本が日清・日露戦争で、列強に伍する武力を発揮している時代の産物として、金太郎も武力を貯えた小さな英雄像のイメージで描かれたのである。

金太郎といえば、相州足柄山を誰しも想像するが、江戸時代には、足柄山に特定しているわけではなかった。今、私の手許にある近世江戸でもてはやされていた赤本類のうちの「きんときおさなだち」を見ると、主人公の金太郎に相当するのは、快童丸といい、信濃国上路の山

の山姥の子どもだとされている。信州木曽の山中の一角にも、金時山の名称もあり、越後国にもあるという。共通していることは、金太郎＝快童丸が山姥の子だったという説明である。

これを口承文芸の世界では「山姥の子育て」と包括している。山姥は、その基礎に里人の山人観が反映している。老婆のイメージよりも、豊穣をもたらす出産能力をもった若い女性のイメージがある。いつも出産のことを考えており、里に下りて来て、子を生み、ふたたび山中に戻って行き、子育てに専念する。

山中で子連れの山姥が、子どもと暖をとるため火を焚いている姿を見たという話もよく伝わっている。育てた場所に、姥ヶ谷、子生み沢、乳母懐などの地名が残っている。一方に鬼女のように恐しい山姥のイメージがあるのに対して母親像も広く、西南日本の山間部には伝えられている。

前出の「きんときおさなだち」によると、快童丸は稀代の怪力の持主であって、野獣たちを服従させ、山中で多くの獣たちと遊びまわる。この情景は、里人たちにとって信じられないのであり、「山姥の子」であり「真赤な小僧」であるとその特異性が語られるようになる。山中の獣の王である熊と首引きや棒引きの力競べをして、これを負かしたとき、ちょうど猪狩にやってきた源頼光の家臣平井保介が居合わせ、驚天する。頼光は、山姥の子で獣を手玉にとる不思議な童を、召抱える決意を固める。

その間、母親の山姥が、金太郎をしつけるのであるが、猿、むじな、狐、兎など集めて力競べではなくて、ままごとや歌や踊りなどを一緒にしながら、金太郎を遊ばせている。その中で、刃物を勝手に使って手を切るなとか、兎やむじなと仲良く遊ぶようになどと母親らしくあれこれ金太郎に指図している。

静岡県下の佐久間町や水窪町には、山姥が次々と子を産んで育て、その子らがいずれも山の神に仕える修験者になり、後に山の主になったことを説く話がある。山の神の使者だとしてもっとも多く選ばれている獣は、狼あるいは山犬であった。江戸時代には、国産の狼が全国的

に生息していたと報告されている。明治三十八年に、奈良県で狼が射殺されたのを最後にもう日本人の眼前に姿を現わさなくなったけれど、山の神に仕える精霊の一つとしての狼信仰は民間伝承の中に残っている。とくに狼が出産と関係するという言い伝えは多い。狼が子を産むと、産見舞（うぶみまい）とか産養（うぶやしな）いといって、わざわざ供物をもって、山の神に供えるのである。山の神は女の神で、お産をするという信仰があり、その際、山の神に仕える狼が特別な役割をもっていたことが、狼と出産を結びつけることになったのであろう。山姥が山の神の変化（へんげ）であるという予想があり、山姥の出産は、山仕事に関係する山民たちにとって、豊穣を約束してくれる重要な現象であった。そして狼の出産も同様に考えられていたのであり、とくに幽冥界から霊魂を導き出すには、超自然的能力が必要だとすれば、狼がその仲立ちをしたと思われたのである。

山姥から生まれた霊性のある子どもは、自然と山野を歩きまわりながら、精気を吸いこみ、自由自在に野獣と戯れて暮していると想像されたのであった。

足柄山の金太郎や、信州上路山の快童丸にも、こうした山姥＝山の神の加護をうけた子どもに対する信仰が十分にうかがえるのである。しかし平地に住む農民たちにとってみると、山中で山姥が産んだ子どもは、どうしても異常児に見えたのであり、山中での異常出誕の結果、超能力を備えて出現した不思議な童子という印象が濃かったのである。

江戸の絵本の中で面白いのは、快童丸が、遊んでいる最中に雷鳴が轟き大雨が降ったことを怒って、雷をわざわざ落下させ、木に縛りつけてしまうという場面が描かれていることである。かつて『日本霊異記』巻一に、天皇の側に仕えるチイサコベノスガルなる者が、天皇の命により、雷を地上に落下させてそれを捕えたという一件が記されている。この小子部栖軽なる存在は、小さいが知力と怪力をもった小男として描かれていた。

金太郎や快童丸は、共通して、五体が朱のように赤く、産髪を四方に乱した姿で登場している。この朱色は

呪的な色である。また金の字を白ぬきにした腹がけをつけた姿からもこの童子が、並みの子どもではないことを物語らせているのである。そして多くの場合、鉞(まさかり)をもち、獣たちの先頭に立っているが、鉞が山中を歩く際に実用に加えて、魔除けの役割を果たしていたことを示している。

さて話の筋は、頼光が京から訪れて来て、快童丸に出会い、熊や猿を投げ殺す怪力にほれ込んで、家来にして都へ連れて行き、やがて元服して坂田金時として出世するわけであるが、元服と同時に、生き生きとした野生児の面影は消滅してしまう。つまり頼光の家臣として、世俗社会の構成員になり、その社会の一員として公認されてしまうからである。

童子は、神仏など超自然的なものに仕える特別な霊力の持主であり、本来仏教用語にもとづいている。童が若々しい力強い肉体をもつ存在であるから、子どもの時代に想定され易い。金太郎も童に特有のお河童あたまの童髪のスタイルをしており、山の神・山姥に仕える童子が一つのモデルであった。しかし山の神が女神でかつ出産する働きを示すために、山姥の産んだ子どもというように脚色されるに至った。

金太郎譚とは別に、有名な童子として丹波大江山に住むという酒呑童子がいる。彼は頼光に征伐されてしまったが、山中の異人の代表的存在で、終生童子として生きていたことになる。ところが金太郎の場合は、山姥の子であるが、その本体は、山の神に仕える童子だったかも知れない。彼は成長するとともに、都に出て俗人として出世したのであり、同時に、世俗社会の一人前になって、童子であることを止めてしまったのである。

赤ら顔で、朱色の子という異端児ぶりは、山中の異人の姿をとっているが、とくに雷を捕えたことから、雷神の使者ではないかという説もある。かつて天皇に仕えた小子部栖軽の例のように、雷を捕縛することは、天神をコントロールする機能があったことを示しているかも知れない。

しかし一方では、幼童のイメージは、つねにこの世の

ものならぬ能力を秘めた存在という大人からの見方もある。都の人々にとっては、東国の辺境の山奥に住む山人の一族の中から怪力の少年を発見して、都へ連れて行き、俗世間で一躍有名にさせたという物語なのである。興味深いことは、山中で成長する幼少年時代の子どもの生き方である。金太郎は、自然に親しみ、動植物と共に生きる、人間本来の生き方を示した見本であった。たぶん大人にとっての子どもの理想像の一つなのであろう。

猿や狐狸兎などの弱少動物とは一緒に遊び、熊や猪などの強い動物とはつねに対抗して力競べをして挑戦し、相手を打ち敗り実力を貯えていった。力競べは一つの成長期の試練なのである。その結果獲得した力を発揮するのが、都への出世という契機であり、金太郎は、自然と共生する中で身に付けた能力を、世俗社会における武力に転化させて名を残したのである。この素材がお伽話や絵本、歌舞伎、常磐津などの芸能に使われて、人気を集めたのも、子どもから大人に成人する時に、その能力をいかんなく発揮した少年への期待が具象化されたためであったろう。

もし金太郎が、成人期に機会を逸していたならば、大江山の酒呑童子と同じ運命をたどったにちがいない。酒呑童子は、山中で貯えた能力を認められないまま成長し、大江山の主になった。山と里の対立関係からいえば、里を襲撃し、里に災厄をもたらす、悪の存在になった。そこで文化の中心にある都の代表である頼光やかつての同類だった坂田金時らによって滅ぼされてしまう。そして酒呑童子は、死後大江山の祭神になって代々崇りが鎮められるよう祭祀をうける身になっている。

しかし金太郎の方は、坂田金時になって、有名な武将として名を残したが、俗人であるから神化しなかった。むしろその子ども時代が懐しまれ、子どもの理想像の一面を示す存在として伝承されている。文化と自然、中央と周縁の対立は永遠の課題であるが、金太郎が子どものシンボルとして自然を体現していたことを、文化に属する大人はいつも確認したい気持があるのだろう。

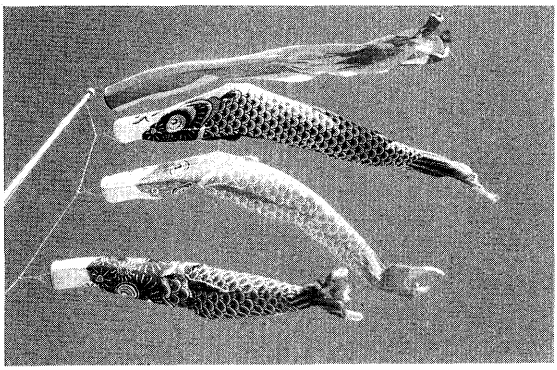
（筑波大学）

鯉のぼりの里を訪ねて

――埼玉県加須市――

鯉のぼりの里、埼玉県加須市を訪ねたのは北風の吹く二月某日。東武伊勢崎線加須駅を降りると駅前広場にはりんと冴え渡った冬空に元気よく鯉のぼりが泳いでいました。

〝加須の鯉のぼりは、明治の初めの頃、このあたりで傘や提灯を作っていた人たちが材料



加須駅前にて

の和紙を利用して作った鯉のぼりを、露店などで売ったのがはじまりといわれています。

明治の中頃になるとその需要も多くなり、製造の専業化がはじまり専門メーカーとしての鯉のぼりづくりが確立され、今では四軒のメーカーで生産されています。〃（加須市観光課パンフレットより）

他がスクリーンによるプリントの鯉のぼりを生産する中、橋本弥喜智商店一軒だけが手描き鯉のぼりを制作しているというので、訪ねました。

季節柄、店頭にはお雛さまが並べられ、販売、配送に大忙しの様子。三代目橋本隆さんに導かれて古い日本家屋を一歩奥へ入ると、そこでは三代目のお母様がミシンで吹き流しの縫製中、さらに二階へ上ると、見事な何十体もの手描き鯉のぼりが行程の途中で吊るされ乾かされており、この道五十五年の野中勝一さんが金引きをしていらっしゃいました。三代目隆さんと野中さんにお話を伺いました。

――鯉のぼりの由来について教えてください。

● 鯉のぼりの始まりはさほど古いものではなく、江戸時代、町人から始まりました。端午の節句（端午は月のはじめの午の日、漢代以降、五月五日を端午というようになった。）は、平安の王朝時代より、鎌倉・室町・江戸・明治時代まで国家的な祝祭日でした。江戸時代中頃、三月三日の雛まつりを女子の節句と決めたのに対して五月五日を男子の祝日とし、武家では、男子の出生を祈り祝って屋外に家紋をしるした旗指物、幟、吹流し等を飾り立てるようになりましたが、町家ではそれを許されなかったので、これらのかわりに鍾馗や武者を描いた幟や、中国の伝説にある「鯉は龍門の滝を登り龍となって天に昇る出世魚」といわれ、健康と勇気と成功の象徴とされている鯉の形を吹き抜きとすることを考え、民家で立てるようになったようです。

――手描き鯉のぼりの出来上るまでを教えてください。

●最初、綿布を鯉の形に裁断し、ミシンで一体一体縫製します。そして鯉の目の位置を決め、頭、胴、尾の順に素描き、うす墨、こけ出し、ボカシ、目に色付け、群青、金引き、黒目入れ、腹ビレ付け、口輪、口紐、口金付けの順に行います。彩色だけでも金銀他12色。雨にも流れず、陽の光にもさめない顔料を使用し、描いては乾かしの18行程を経て、完成まで約一か月かかります。

——他はスクリーンによるプリント加工の中で、手描きを続けてこられたのは何故ですか。

●数からいえば機械とは雲泥の差ですが、肉筆の美しい力強い線、繊細な毛先の線、独特のぼかしの味、絵の具をたっぷり含んだ線からだんだんかすれていく色彩の濃淡は、機械では決して出せません。心を込めた生きた線や柄が表現できるのが何よりでしょう。進歩できるのは手描きですよ。祖父の代からの手描き一筋にこの二階で家族でやっています。機械を入れると場所、従業員等と、量はできても余計な事で仕事が増えるでしょうね。近年、本物を求める皆さんからの注文が後を絶たず、嬉しい悲鳴をあげています。

——鱗のデザインや、色などは年によって変化するのですか？

●そうです。職人は行程の一部だけを受け持つのではなく、全行程をやりますので、自然に研究熱心になります。作ろうとする素材と対話ができます。発見、創造ができます。機械ですと鱗のデザインを変えようと思うと何台もの機械を新しくしなくてはなりませんが、手描きですと筆一本で変えられます。

●毎年社長がデザインの原案を出して、皆で意見を出しあい、描いてみて工夫しあって昨年の鯉よりも良い鯉を作りたいとデザインを決めます。決まると今度は昨日の鯉よりも良い鯉を作りたいと、一筆一筆に心がこもりますよ。

——世の中の流行やデザインにも敏感でなくてはいけませんね。

●そうですね。世の中の流行もあるでしょうが、空に泳いだ時に元気に泳ぐ鯉にいかに近づくかと考えていま

す。例えば、鱗の色ですが以前は一色でしたが、今は濃淡三色にしています。本物の鯉のように、背は濃く腹にむけて淡くしています。

――わあー本当だ。おっしゃるまで気づきませんでした。

●気づかれなかったってことは、自然の鯉に近づいたことかな？（笑）

――鱗や目の周りの金引きの模様は、とても大胆でナウいですね。

●そうですか。昨日まで見えなかった線や色や形が見えてくるんですよ。鱗の金引きの形も今は、丸いデザインにしています。又、目の周りも以前はぼかしていたのが、今は筆の先ではねています。

――一番難しいところは？

●その御質問が一番多いですね（笑）鯉は大空で勝負するもの、遠くから見られるものですから、細い線、小さい柄は消えてしまうので、必然的に大柄なデザインになります。しかし、お客様が購入しようとする時は間近で品定めをする。その時でも魅了するには微妙なタッチも必要なんですね。この相反することをなんとか仲よくさせようとするところに難しさがありますね。

――初代橋本弥喜智さん製造の手描き鯉のぼりが、皇太子殿下の初節句に献上されたそうですが

●そうなんです。はじめにお話したように、鯉のぼりは町人のものなのです。それが皇室始まって以来初めて、大内山の緑の中にひるがえったのですね。昭和九年のことです。

――この鯉のぼりの長さはどの位ですか？

●これは1.5m、あの大きいのは13mです。今はマンション住まいが多く、鯉のぼりを立てたくても立てられないので、小さい物が求められています。小さいのは子ども服と同じで、材料は少くても行程に手間がかかります。85cmの和紙手描き鯉もあります。

――雨が降ると下ろした方がいいのですか？

●終戦直後までは和紙でした。和紙は大きさが限られているので貼りあわせて作ったものですから、すぐに風に

もっていかれましたね。色も染料を膠でとめていましたから、雨に弱かったですね。それで、雨に強いナイロン製スクリーンによる大量生産の可能なものがはやり、何本もの鯉をつけるようになりました。ところが、これまた住宅事情で何本も立てられないので、一本でも小さくとも良いものをと、再び手描きが見直されてきましたね。今は顔料ですから雨にも強いし、長持ちしますよ。

——祝ってもらったお子さんがおとうさんになっても、息子の鯉のぼりと並べて上げられますね。

●そう、ほこりをよくはたいて、乾燥させて湿気の少いところにおいていただければ何年でももちますよ。

——昔は、吹き流し、真鯉、緋鯉と何本も上げなかったのですか？

●元は武者絵幟ですからね。男の子が生まれると真鯉を一本、親の実家から贈ったものです。それに見合ったものをと、吹き流しや、鎧、兜、五月人形等を親戚が贈ったものでした。

——童謡に♪大きい真鯉はおとうさん、小さい緋鯉は子

どもたち♪とありますが、

●真鯉、緋鯉と雄、雌は関係ないですよ。我子が元気に育つようにという子どものお祝いに小さい鯉が子ども達なんてことはない。戦後、ナイロン製品大量生産時代になってマッチする歌詞ですね。昔は鯉のぼりセットなんてなかった。大量生産時代にセットが出てきたんですから。♪いらかの波と雲の波♪が本当でしょうね。真鯉一本で上げてましたよ。生まれたお子さんの名は、真鯉の腹に入れます。

——これは家紋の型ですか？

●そう、家紋は吹き流しに入れています。

——こちらにナイロン製の注文もきますか？

●きますよ。デザインはこちらで考えて外注に出しています。数はできても、縫製、口輪等の手作業がおいつきませんので。ホラ（と壁に止めてある注文書を指さして）女の子の誕生を祝って〝ピンクの鯉のぼり〟を注文する方もいるんですよ。グリーンの注文もあります。

——「親子手描き鯉のぼり教室」が去年行われたとか、

●はい、勤労会館でやりました。喜んでいただけました。自分で描いた鯉のぼりを上げるのは格別でしょう。私なども、自分で描いた鯉のぼりはすぐにわかります。大空に自分が描いた鯉のぼりが泳いでいるのは嬉しいものですよ。三月から四月、五月は大好きです。（笑）矢車のカラカラと回る音は滝の音に、吹き流しは滝の流れに見立ててあるといいます。吹き流しの五色は、中国の古俗で、五色の糸を臂（ひじ）にかけて病気・災厄をはらうことからきているとか。日本でも、菖蒲・蓬・楝（おうち）などに災厄をはらう力があるとされ、身につけたり、屋根にかける風習があったそうで、矢車の上に今でもこれらの葉をさしてあるのを見ることがあるでしょう。何はともあれ、子ども達に、元気に大きくなってほしいという心の表れですね。

——今日はどうもありがとうございました。

帰路、加須駅へ向う途中立ち寄った人形店に武者絵幟がかかっており、嬉しくなってお店の方に伺うと、今で

も山梨一帯、静岡、福島、栃木の一部には端午の節句に武者絵幟を立てる風習が残っており、武者絵を描く方もいらっしゃるそうです。「その地方は、未だ尚武の気風を尊ぶのでしょう」とのことでした。

（編集部）

武者絵織

臨床の現場から ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 子育てを考える　その2

いじめ・いじめられ……

飽田　典子

昭和六十年二月、東京・中野富士見中の鹿川君が級友のいじめに耐えられず、「このままじゃ『生きジゴク』になっちゃうよ」との遺書を残して自殺した事件は、今も教育の荒廃を象徴する出来事として、記憶に新しいことと思います。級友たちが「シカを死んだことにしよう」と計画した葬式ごっこに、担任だけでなく計四人の教師が参加し、追悼の色紙に署名をしたという事件でした。しかも彼の死後、初めて事の重大さを感じた担任は、色紙を「返してほしい」「なかったことにしてほしい」と頼んでまわったといいます。

彼が死を以って訴えることをしなかったらと思うと、背筋が寒くなりますが、それにしても死を選ぶとは、その代償があまりにも重すぎます。この担任は理由がどうであったにせよ、いじめ側に加担していたことが明らかですが、見て見ぬふりをして暗黙に容認して

いたり、あるいはいじめられる側の問題として指導の手をこまねいている担任など、この問題をとおして、〝教育者〟の陰の実像に触れた思いがしました。それが子どもたちにとっては、学級王国といわれる担任の裏の実像であることを考えると、死しか方法がなかった鹿川君の追いつめられた気持はどんなであったか、想像するに難くないと思います。

人が集団で生活している限り、強い者が弱い者をいじめたくなるのは、人間の悲しい性(さが)かもしれません。だからいじめがあっても仕方がないというのではなく、一人一人の子どもが自分より弱い者をいじめたくなる心をcontrol出来る人間に育てていくことが、大切ではないでしょうか。今回は相談に来た何人かのいじめられっ子やいじめ―いじめられの研究（東京都立教育研究所紀要三十一号「いじめ―いじめられの心理と構造に関する基礎的研究」）を通して、この問題を考えてみたいと思います。

事例一　幼稚園以来ずっといじめられ続けてきた太郎君

太郎君は中学一年生ですが、幼稚園以来ずっといじめられてきた子どもです。中学に入り新学期早々の四月下旬、授業中いきなり大声をあげて仁王立ちになり、椅子を振りまわしたとのことで、学校から相談室を紹介されて、相談にみえました。この事件が起る前から、しょっ中「あっ、あっ」と声を出していたり、時には体を大きく前後にゆするので、彼のまわりの席の者は落着いて授業を受けられないというのです。

あまりに症状がはげしいので、病院にも行ってみたところ、憤怒けいれんとの診断でした。これは体の中にたまった怒りが、発声や律動連動の形で発散されているということのようでした。

◎学級全体で一人をいじめる◎

太郎君の話をよく聞く一方、お母さんに太郎君の様子を観察してもらった結果、こうした怒りの発作は級友からのいじめが特にひどい日に多いことがわかってきました。授業中、後の方から消しゴムが飛んでくるのはしょ

っ中で、休み時間にトイレから戻ってみると、シャープペンシルの芯が全部折られていたり、教室の移動で廊下を歩いていると不意に横から足蹴りをされたり、すれ違いざまに頭を小突かれたりは毎日のようでした。仁王立ちになったその前日は、のどがかわいたので水を飲んで席に戻ると自分の席が黒山の人だかりになっているのです。何事かと思って近づいてみると、女の子が自分のカバンの中から生理用のナプキンを取り出して、「いやぁねぇ、こんなもの持ってるう。エッチ!!」と皆の前で騒いでいるのです。びっくりした彼がいくら「違う」「僕は知らない」と言っても、「カバンの中から出てきたんだから、ウソを言ってもダメ」と受けつけてもらえませんでした。その前にも身体検査の日、男子五〜六人に囲まれて、あっという間に中に女子がいる保健室へ入れられて、あとで先生に叱られたことがあったので、彼は皆から「エッチ、エッチ」とはやし立てられるようになっていたのでした。

◎いじめられる方が悪い◎

家に帰ってその日の出来事をお母さんに聞いてもらうことで、学校での気持を解消していたようですが、あまりにひどいのでお母さんが担任の先生に話したところ、「やられるのはやられる理由があるからです。何をやってものろくて、皆とテンポがあわないし、授業中の彼は目障りで、こっちも落着いて授業が出来ない位です。まず自分を治そうとしないで、まわりにやめてくださいというのは、お門違いではありませんか」と言われてしまいました。その上「中学生にもなって一々、親がこんな事を学校に言ってくるのは過保護です。親が過保護だから、子どもは自分を反省しようとしないのではないか」ととりつく島もない態度でした。また「生徒たちは遊び半分でやっているのに、その遊び心がわからない彼の方が問題だ」とも言われてしまいました。

◎自傷行為へと発展し、〝病気〟ということですまされてしまった彼のいじめられ◎

今は元気に高校生活を送っている彼の中学校三年間は、鹿川君ではありませんが、地獄のような毎日だったと思います。いじめても先生たちが彼の方に原因があると思っているので、生徒たちにとってはいわば公認されたいじめでした。結局、事態は次第に悪化し、家に帰るなりお風呂に飛び込んで、頭のてっぺんから足の先まで何時間もかけてきれいにしないと気がすまなくなりました。小突かれた頭を、毎日シャンプー一本使って洗っても、まだ不潔感が残ると言うのです。そして、ついには「生きていてもしょうがない」と自分に包丁を向けるようになり、入院を余儀なくされました。その結果、学校は〝ああ、やっぱりあれは病気だったのだ〟と結論を下し、彼の日々の苦しみを理解しようとする動きは最後までみられませんでした。誠に残念な事ですが、彼の入院後、この学校は対教師暴力の火の手があがり、校内暴力事件に揺れたということです。

事例二　トラブルメーカーの次郎君

――社会性が育っていない故の嫌われ者――

次郎君は小学校一年生ですが、一人っ子で大事に育てられてきたせいか、集団のルールを知りません。何でも自分が中心でないと騒ぎ立て、友だちの物でもほしいと思うと黙って持っていってしまいます。それで時々、友だちとけんかになるのですが、先日も休み時間に皆とボールけりをしていて、自分がけったボールがそれて、そばで遊んでいた女の子に当ってしまいました。ところがあやまることを知らないので、相手の子が泣き出しても知らん顔をしていました。そこで気の強い女の子に「次郎君、あやまんなさいよ」と言われたのですが、こういうことに慣れていない彼は素直にあやまることが出来ず、皆に向って「イーダ」をやって逃げ出してしまったのです。こんな事が重なって、だんだん次郎君と遊ぶ者がなくなり、彼は友だちを求めてチョッカイを出してまわるという悪循環が始まりました。

◎子どもと距離のない母親◎

担任の先生は低学年の担任らしく、きめの細かい指導を心がけ、休み時間も出来るだけ子どもたちと共に過ごすようにしていました。そうした中で次第に次郎君の社会性のなさに気づいたのですが、すぐにお母さんに言うのではなく家庭訪問の折まで待って、思い切って話題にしてみました。ところがお母さんは「良いお子さんですね」とほめられることは予想していたけれども、学校で困った子に思われているなんて「うそです。私、耐えられません」とひどく感情的になり、とても冷静に次郎君への対応を話しあえる状態ではありませんでした。以来「先生はうちの子を悪くしか受けとらない」と近所の同級生の親に言ってまわり、次郎君も次第に先生の注意をきかなくなってきて、困っているということです。

事例三　成績が良いということが隠れ蓑に

これは小学校六年生の学級に起ったいじめです。

夏子さんは才色兼備の活発な女の子です。どこかに人を惹きつける魅力があるらしく彼女のまわりにはいつも友だちが絶えず、四年生以来ずっと学級委員をつとめています。担任の先生もそんな彼女に全幅の信頼を寄せており、学級経営の中で、時にやんちゃぶりを発揮して困らせる男の子たちをリードしてくれるのを期待している一人です。

二学期に入り、いつも彼女のグループと行動を共にしていたはずの秋子さんの様子がおかしいのです。休み時間になっても皆といっしょに外に出て遊ぼうとせず、一人で教室で本を読んだり、ボンヤリとしています。他の女の子たちも、皆申しあわせたように秋子さんをわざと避けて通り、今までのように誘う者は誰一人としておりません。ある日いつになく給食が残ったので不思議に思い、学級会で話題にしました。ところが皆押し黙るばかりで、時々お互いの様子をチラチラとうかがう者がいる程度でした。明らかに誰かの指令に従っている雰囲気で、女の子の集団から秋子さんがシカトされているらしいことが分りました。給食が残ったのは、その日の給食当番が秋子さんだったので、皆で「バイ菌がついてい

る」「汚い」と食べるのをやめた結果とわかりました。

◎意外にも指令指揮官は学級委員だった◎

女子集団に一連の指令を出しているのは誰か。担任の先生は、学級の女の子たちの急速な変ぼうぶりにびっくりすると共に、早速、事件の解明に乗り出しました。しかし他の事柄であれば何でも素直に応じる子どもたちが、秋子さんの事に及ぶととたんに、皆一様に口を閉ざし、その結束の固さは想像以上でした。日頃、気が強くて友だちとトラブルの絶えないあの子ではないか、いや大人の前ではおとなしそうにしているけれども、友だちの中では結構威張って命令調のこの子ではないかと疑心暗鬼の目で学級の女の子たちを見る日が続きました。結局、この事件の張本人は何と学級委員の夏子さんだったのですが、それが明らかになった時の担任の驚きは、自分のこれまでの教員としての経験と自信を覆してあまりあるほどでした。この打撃と他の子たちへの申しわけなさで、しばらくは教室へ行くのがつらい毎日だったということです。

◎理解し難い理由でも仲間はずれに◎

夏子さんが、何故かくも徹底的に秋子さんを仲間はずれにしたか、その理由を聞いてみますと、秋子さんが私立中学を受験するのがうらやましかったということです。大人には到底理解し難い理由ですが、こういう理由がまかり通り、強い者にすぐ同調するというのも最近のいじめにみられる特徴の一つかもしれません。

◎〝良い子〟の中にも魔性が潜んでいる◎

成績がよく、明朗活発で誰の目から見ても申し分のない優等生ということで疑うことすらしない一方、しょっ中トラブルを起している、わがままが目立つ等というだけでその子を疑ってかかる傾向は、教師の偏見としてよく子どもたちから指摘されることです。この担任も真相の究明を急ぐあまり、同じ轍を踏んでしまったと言えましょう。しかしこの一件で夏子さんの評価を下げるので

はなく、「あれだけの組織力をもってやれたのは、彼女ならではだと思う」との言葉に、長いこと教師をしてきた人の見識を感じました。

以上の三つの事例を紹介する中でお伝えしたかったことを最後に簡単にまとめてみたいと思います。

事例一の太郎君の例で、いじめられるのはいじめられる側に問題があるとして、指導しようとしない教師を登場させました。確かに大勢の生徒の中には、皆とテンポがあわない、奇妙なくせをもっている等、自分とどことなく肌があわない、いわゆる相性の悪い生徒、極端に言えば生理的な嫌悪感を刺激される生徒がいるかもしれません。教師とて人の子ですから個人的な感情を否定することは出来ませんが、だからといって感情をむき出しにしてよいとも思われません。自分の感情を如何にcontrolするかということは、教師という職業の専門性を問う一つの基本的な問題と思いますが如何でしょうか。

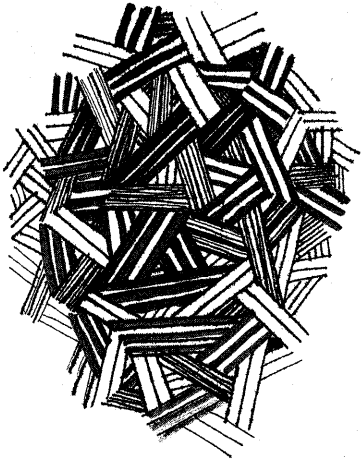
事例一ではまた、いじめられやすい子の特徴なるものに触れない努力をいたしました。それはその子がどんな特徴や皆との違いをもっていようとも、そのことを理由に（たとえば太郎君の場合は、「あっあっ」と声をあげる、体を前後に大きくゆする等）いじめてもよいという理屈は成り立たないという考えからです。事例三の夏子さんのように、理由にならない理由をつけて、いじめを正当化したがる今の子どもたちの風潮の前に、大人は大きく立ちはだかることが必要ではないでしょうか。物わかりのよい大人たちに囲まれて育つ若者の将来が案じられます。

事例二では最近の少子化の傾向の中で、我が子かわいさのあまり、子どもの実感が見えなくなってしまっている母親をとりあげたつもりです。この担任の先生は気をつかいつつ「お宅の次郎君は……」と言ったと思うのですが、このお母さんの耳に届いた時には、「あなたは……」というように翻訳の機能が作動して、まるで自分が先生から注意されているかのような錯覚にとらわれたの

ではないでしょうか。母子の共生関係が子どもの成長を疎外している一例といえます。

事例三では、極めて健康な子どもでも、時に残虐な行為をとりうることを示しました。夏子さんがしたことを彼女と話しあう中で分ったことは、人をいじめる後めたさよりも、相手の困った顔を見て楽しむ気持の方が大きかったということです。「秋子さんを皆で仲間はずれにしてどんな気持がした?」との問いに、「面白かった」と答えたのです。まるで人間を玩具に見立てて遊んでいるのと同じ感覚に驚かされると共に、指導をしにくくさせている一面を垣間見た思いがします。事例一でちょっと触れたことですが、いじめた子にどうしてそんなことをしたのか尋ねると、「遊びでやっていた」と答えることが多いのです。〝遊び〟すなわち悪気でなければ許してもらえる育ち方をしてきた子どもたちに、逆手をとられた思いのする事例です。物わかりのよい、甘い大人の存在も大切ですが、時に悪気でなくても、いけないことはいけないとする毅然たる態度も必要な気がしてなりません。

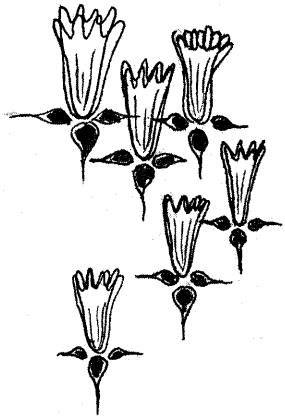
（東京都立教育研究所）



若いお母さんたちへ

長女と私の中学時代

はるにれの会
塚田　幸子



緑の美しい季節を迎えて、戸外へと心が向いて行きます。憲法記念日と子どもの日にはさまれた五月四日が今年から新たに国民の休日になりました。この三連休をどのように過ごすか、それぞれのご家庭で様々に思いをめぐらせていらっしゃることでしょう。

デンバーから帰って、もう四年半もの月日が流れたことになる我が家では、この連休が長いこと待ち望んでいたものに思われます。週休二日体制で、週末毎に家族で

ピクニックやキャンプを楽しむことのできたデンバーでの生活は、日本では当分実現不可能なこととあきらめ始めた頃、貿易摩擦による円高、日本人の働き過ぎ批判による労働時間短縮のかけ声がわき起こってきたからです。私がいくらひとりで不平を言っても、どうにもならなかったことが、今、時代の流れとして、海外からの要求として、大合唱となって、実現の方向へ動き出したのです。その意味で、この五月の三連休は、これまでひたすら働き続けてきた日本人の企業戦士たちとその家族に、家族や友人と共に過ごす時間のことを考え直すきっかけとなってくれることを私は期待しています。とは言え、我が家では、小五の次女はともかく、高校生になる長女が、家族と共に過ごすことを最優先に喜んでくれるかどうか、私はちょっぴり心配しています。と言うのも、長女が中学生になってからは、何をするにつけ、友人と共にする方が楽しくなって、我が家の休日の行動は、それまでのように両親の考えや都合だけで決まるということがなくなってきているからです。

中学生の親となってとまどった時のことは以前に投稿した文に書いたと思いますが、今度はその娘が高校生になるのです。ところが、今は、あの時ほどの不安や期待は、少なくとも私の側にはなく、冷静に受けとめています。恐らく、私自身が、俗に言う子離れを始めたからなのでしょう。当時は、私自身の中学時代の気負いのイメージが、長い眠りからさめて長女の上に重ねられ、長女の側からは、目の前にいる本当の自分の姿を見つめようとしない私に、反抗したのだったと思います。長女の中学時代の三年間、私は私自身の中学時代を単に思い出すだけでなく、現在の私にとってその意味を、長女に照らして、生き直したような気がします。それは、それまで疑ってみることさえしなかった価値観が、次々と相対的なものに変えられていく過程でした。例えば私が、単に思いこみや美化によるのか、自分が中学生だった頃は何時間勉強したとか、親や先生の手伝いをよろこんでしたものだなどと、ついもらすと、「そんなにまでして、良い点を取りたいとか良い子になりたいなんて思わない」

とぴしゃりと言い返されて、黙ってしまうのは私の方でした。長女に反論される度に、私はいろいろ考えました。良くないと知りつつ、「娘はあんな風に言うけれど中学生になれば（中学は公立なので）高校受験があるのだし、試験の度に厳然と点数で評価され、内申書なるものもあるのだ」と我が事以上に心配になったのです。もう少し努力してもよいものをと気をもんでしまうのでした。何度も何度も似たような会話をくり返し、そうこうする内に、多分、長女が二年生になった頃から、私は、頭ではわかっていた当然のことに気がついて、あるいは次第に慣らされ、あきらめて、これは、娘自身の人生であり、いくら母親でも、踏み入ることはできないのだと悟ったのでした。そう思えてからは、心配は心配でなくなり、自分の心配は自分でしているに違いない、私が心を痛めるような領分のことではないのだと納得するようになっていきました。そうすると、どうでしょう。長女は顔つきまで変わってきて、小学生時代のままではあり得ないまでも、その頃のような可愛い笑顔がもどってきたのです。私は長女に対してそんなにも重圧をかけていたのでしょうか。今になって思えば、長女の側から見れば、私自身の顔つきや態度が、彼女に対して同様に変化したのだろうと、苦笑させられます。

長女が幼ない頃のことを夕食の時に、何かの拍子で思い出し、語り合ったことがありました。長女とにこやかに話し合える場面の増した昨今のことでした。まだ幼稚園に行くか行かないかの頃のことです。彼女はある時期家の中でばかり遊び、ぱったりと外遊びをしなくなったことがありました。私の頭には、「子どもは風の子、外で元気にとびまわるのが、健康かつ良い子である」という図式があり、どうにかして彼女を外に出したいと強く思うようになっていたのです。私は、ある日ある時、強権を発動して、いやがる彼女をドアの外に押し出し、外で遊んでくるように言い、ドアの鍵をかけてしまったのです。「さあて、これで、いやが上にもあの子は外で遊んでくるに違いない」と私は考えました。三十分だったでしょうか、一時間だったのでしょうか、実際の時間は

さておき、私の側からは十分に思われる時間がたって、「きっと外で何かを見つけて遊んでいるに違いない」という自信と、「そろそろ何をしているか見に行った方がよいのでは」という心配とで、そっとドアを開けてみると、何と、そのドアに寄りかかるようにして、泣き顔で（泣いてはいなかった。声は少しも聞こえず、ドアを叩く音もなかった）しゃがみこんだままの恨みのこもった目つきの彼女の姿があったのには、私の方がびっくり。何ということでしょう。あの小さい身体で、彼女は私より精神力で勝っていたのです。完全に私は敗北していました。長女はきっとこの時も、目の前にいる我が子のしていることを表面だけでとらえ、固定観念によって暴力的に我が意に従わせようとする母親に抗し、その非を認めさせようとしたのでしょう。「三つ子の魂百まで」などと言うまでもなく、長女は一貫して今日まで彼女自身であることを主張し続けたのだということに私は新たに思い到ったのでした。

話は連休の過ごし方にもどって、私たち夫婦の価値観である緑の山中での休日に、長女が乗ってくるかどうかは、以上のような理由もあり、未定というところです。私たち夫婦にしても、これまでの十七年の生活という歴史の中で、共有してきた価値観があり、最近は長女のそれとの対照によって、むしろ互いにその共通性を確認することがふえたような気がしているのですが、ほんの数年前には、激しい対立と妥協のくり返しであったことは皮肉にも長女が証人になってくれることでしょう。夫婦の間にも何度も危機はあったのです。結婚という出会いもまた、異なった価値観（文化）の出会いであり、二人の間には、大なり小なりの衝突、摩擦が絶えず起こったのでした。けれど、このぶつかり合いこそが、お互いを深く理解していくためになくてはならないものだったのです。そして二人の間に生まれた子どもは、両親のどちらにも似ていながら、全く異なる存在でもあるという当り前のことも、時として見失ってしまうことがあるものなのですね。母親である私は、そう納得してから、長女との関係が再び安定的になってやれやれと思っていまし

た。

一方、帰国して以来、典型的な、日本人働き中毒ビジネスマンに変身させられた夫の方は、朝の出勤前、朝食時にあわただしく家族と顔を合わせる以外、二人の娘たちと触れ合う時間が、平日はほとんどないようになり、休日も疲れ切った心と身体を休めるだけで精一杯、家族でくつろいだり、積極的に楽しんだりする時間的、精神的余裕が加速度的に減っていきました。それは今もとどまることなく進行しており、本当にいつ倒れてもおかしくないというまで事態は悪化しています。こんな状態は、私の夫だけでなく、日本の多くのサラリーマンの実態であるということを知らない人はほとんどいないはずです。毎日のようにマスコミで報じられているからです。そして、そういう働き中毒にかけられたサラリーマン家庭では、どこも似たような状況になって、父と子らの触れ合いが極度に少くなり、コミュニケーション不足から、父親と子どもたちがお互いを理解する機会を失っているという例も数多くあるものと思います。こんなことを言うのも、ようやく私自身が、長女に対する見方、接し方を改善（と今は思っている）したと安堵した矢先に、今度は夫と長女の間に衝突が起こったからです。先の論法でいけば、これも、双互理解のための第一歩かもしれませんが、私にとっては、仲介役としての新たな問題です。私自身が、それまでは、夫の考え方に近かったのですから、その気持ちもよくわかり、今は長女の気持ちもわかるようになっているので、見ていて内心ハラハラし、静観すべきかも含めて、どこでどんな形で間に入るべきか、とまどいを感じていました。

事は、いつも、ささいな事から起こります。子どもたちが今しも就寝という時刻に、仕事上のつき合いでかなり酔って帰宅した夫が、食卓の上の長女の成績表を見て、（運悪く居合わせた）長女をいきなりどなりつけたのです。長女は、恐らく覚悟はしていたものの、酔った勢いの父親の態度にも反発したのでしょう。泣き声で捨てゼリフのように言い返し、逃げるように床に就いてしまいました。その晩は夫も長女の態度に腹を立てなが

ら、やはり酔いと疲労で寝ついてしまい、翌朝に事件は持ちこしました。長女に対して表現上まずいところもあったという意味で、夫が成績表のことに触れた途端、長女は蹴るようにして席を立ち、朝食の席が台なしになりました。朝食はいつもより長女の好みに沿っていたので、私がそう言い、もっと食べて行くよう促すと、食べに来ただけという態度で、話を続けようとする父親にはかえって背を向け、それでも話を続けようとすると、今度は箸と茶わんを持って席を立ってしまったのです。これには父親も、母親である私もびっくり。私も思い余って、とにかく席にきちんとつくようにと言いました。結局、家を出る時間となった長女はそのまま出て行ってしまったのです。収まらないのは夫です。出勤するまでの貴重な残り時間すべてをかけて、私に、どんなしつけをしているのかと怒りをぶつけ、成績どころか、立ち居振る舞い、人としての礼儀について、「生きていく資格がない」とまで言い、どんなに重要であれ、その晩は仕事はさておき早目に帰宅し、長女と話をつけるのだと言い残し、家を出て行きました。

その日学校から帰った長女は、生理痛で苦しんだものの、それも治まった頃、私は、朝食時の事件についてどう思っているのかを問い、反省すべき点を指摘し、父親の真意を伝え、両親の考えを伝えた後、彼女自身に、帰宅してくる父親に対してどんな対応をするのか決めておくようにと言っておき、夕刻までに、対立やお互いの誤解の根は一応取り除かれたのです。が、それにしても、父親が、日常的に早く帰宅し、夕べの団らんが充実したものになれば、こんな誤解や対立の激しさはやわらいだものになっていたのではないかと私は思うのです。その晩は、勢いこんで帰宅し（大事な会合をひとつ欠席してまで）、長女と話し合うつもりであった夫ですが、それでも、体調が悪くて早目に就寝してしまった娘たちにとっては、すでにその日は終わってしまっていました。私が一応ひと通りの話をしておいたことを聞いて、夫もその晩は早目に床に就きました。対立の気分は消えかけていましたが、なお私はハラハラして翌朝を迎えました。

珍しく早目に寝たせいか、全員がいつよりも一時間近くも早く起き出して、夫と長女はと見ると、互いに相手を気遣いながら、少しぎごちなくも、にこやかに会話を交わしているので、私もようやく胸をなでおろし、ひとまずは、一件落着となりました。

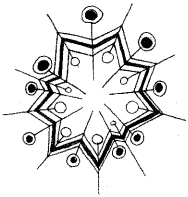
それにしても、父親の存在が疎ましく思われる年代というものがあるのでしょうか。この頃、長女は父親の帰宅を気にかけ、ある夜仕事で泊まりこみになり、帰らなかった父のことを、「お父さん、夕べ帰って来なかったの？」「そうよ」「別にいいけど。いない方が気楽で。」と言っており、私には何となく気にかかっていた矢先の事件でした。

更に何日かたって、私は、「別にいいけど。いない方が気楽で。」と言っていた娘の言葉はむしろ全く逆に、父親と正面きって向かい合う必要があるという信号だったのではないかと気づき、ハッとしました。父と子は互いに愛し合いながらも、旧世代と新世代の価値観の対決を迫られる時を経ていくものかもしれません。それは男の子にだけあるのではなく、父と娘の間にもあるのだと思います。私自身も中学時代以来、父親としばしば意見を対立させ、その過程で、自分自身の生き方を明らかにしていったのだと長女を見ていて思うのです。それは巣立ちのための羽ばたき練習のようなものでしょう。

結局、「幼児の教育」という本誌のタイトルにふさわしいかどうか迷いながら、高校生にもなる長女の話題ばかりなのですが、小学二年の終わり近くから、五年生の終わり近くまでをアメリカで過ごした間、長女は、映画では「ネバーエンディングストーリー」となったミヒヤエル・エンデの「はてしない物語」を日本語で三度も読み返し、エンデの作品はあの「モモ」を含めて全て読んでいます。私も、「はてしない物語」と「モモ」を読んで大変おもしろいと思ったのですが、それでなおさら長女とは共通の体験を持ち、考え方も相当一致しているはずだという思いこみが、私の側にあったように思うのです。私が考慮しなかった長女と私との差異はあまりにも大きいものがあります。年齢の違い、育ってきた時代、

環境の違い、その他諸々の違いを私はほとんど無視していたも同然でした。同じ「おもしろい」という感想でも、同じ作者の同じ作品からでも、読み手によって、得るものは違っていたはずなのでした。

まわり中が、外国人（自分にとっての）であったデンバーの生活では、予期せぬ親切や思いやりがやたらとうれしく感じられたものでした。そして日本人同士の方が、冷たいとか意地悪く思えたものでした。どちらも実際以上にそう感じられたということです。もう一度行ったら、もっと気楽にやれることでしょう。それと同じように、長女との関係が、これまでよりリラックスしたものになるのかどうか、それは連休の予定と同じく未定です。



以前、某幼稚園で日々を共にした子ども達の中にEちゃんがいました。笑顔のかわいい人なつっこい女の子です。難産が原因で、脳の一部に障害があり、言語・発育にも遅れがみられるといわれて入園してきました。毎日を共にしているとEちゃんの〝障害〟は見えません。脳の、計算を司る部分に障害があるといわれているのですが、幼稚園の生活では支障はないからです。順番は友達の顔を見てわかるし、数を数えることも六以上はわからなくなるようですが、両手の指を見ながら友達に楽しげに教わっている光景がよく見られました。卒園時には両手の指を使えば、十まで数えました。数の(?)専門家は、数えたのではないとおっしゃるかもしれませんが……。

言語も発育も、在園二年間に伸び、生活を共にしている者達は、誰もEちゃんに障害があるとは思っていませんでした。ところが「E子は障害児だ。数学ができない子だ。」とあちこちで話している人がいました。Eちゃんのおかあさんです。「E子は小学生になったら落ちこぼれる。どうしよう。」と、よく不安をうちあけにみえました。そのたびに、日常生活には何の不安もないこと。むしろ生き生きしていることの大切さ。数学がわからないとしても、生きていく上では他の部分が補なって余りある等、その都度お話しするのですが、定期検診で脳専門の医療機関へいくたびに、大きな不安におそわれるようでした。

某私立小学校に進み、「算数の成績が伸びなければ進級は難しい。」と毎年、校長室に呼ばれながら高学年になっています。

Eちゃんのおかあさんから便りが届きました。中学生活への不安が何枚にも渡って書かれてありました。

今月号の津守先生の文章をEちゃんのおかあさんに是非読んでもらいたい、もうすぐ中学生になるEちゃんに会いに行こう、そう思いました。

(Y)

幼児の教育　第八十七巻 第五号
五月号　©　定価 四〇〇円
昭和六十三年 四 月二十五日 印刷
昭和六十三年 五 月 一 日 発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本 田 和 子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社 フレーベル館
振替口座東京九一一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

保育の再点検〈全5巻〉

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。
子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

①望ましい生活習慣
②望ましい集団づくり
③望ましい当番活動
④望ましい行事と生活
⑤望ましい言葉の指導

平井信義・大場牧夫・森上史朗　著

A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,750円

子どもの心と明日を考える キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

みんなで1輪車・2輪車・3輪車のびのび、わくわく、楽しいね。

一輪車 フラミンゴ 14

一輪車フラミンゴは、「日本一輪車協会（ＪＵＡ）唯一の公認商品です。フラミンゴは、軽量で扱いやすく、サドルの破損を防ぐサドルプロテクターなど、随所に親切設計をほどこし、シートクイックレバーでサドルの調節が簡単にできます。一台に一冊、専門教則本が付いています。

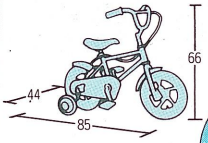
青 01　赤 02
タイヤサイズ：14
股下寸法：
43.6〜51.1cm

各 ¥15,800

キンダーサイクル〈BMX〉

園用に特別に開発・設計されたモトクロス仕様の補助輪つき二輪車です。チェーンカバーや、後輪ブレーキの採用など安全性を重視しました。

ボデー：鉄製　焼付塗装
車　輪：ゴム製ノーパンクタイヤ
サドルシート：プラスチック製

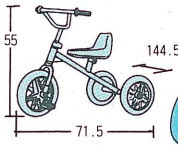


¥14,000

キンダー三輪車〈カスタム〉

機能美を追求したシンプルなデザインの三輪車です。
軽くて、走行性・操作性に優れ、強度・耐久性・安全性にも優れています。

本体フレーム：鉄製　焼付塗装
車　輪：プラスチック製ホイール
　　ＥＶＡタイヤ
サドル：プラスチック製



¥11,000

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館